

## 日本という国「日本はまだ大丈夫その2」

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。

2003年、イラク戦争で正規軍の戦闘が終わったあと、人道支援を目的に自衛隊が2009年までイラク、サマワに派遣されました。（宿営地は2006年撤収）

主に5万3000トン、延べ1200万人分の給水活動（撤退時に10倍の能力をもつ浄水装置6基を寄贈設置）。サマワ総合病院を中心に医療支援、診療所66ヶ所設置。学校36校、道路延べ約80kmの復旧整備、60万メガワット(12万人に供給可能)火力発電寄贈設置。一日約700人の現地住民の雇用を行いました。

2004年10月23日、自衛隊宿営地に迫撃砲弾が着弾。その後、前代未聞のデモが現地で行われました。

デモのスローガンは「日本の宿営地を守ろう」「日本の支援に感謝する」というもので、宿営地に詰めかけ、口々に日本に帰らないでと懇願しました。また、この時に自衛隊の滞在延長を願う署名運動があり、2日間で1500名の署名が集まりました。

これは、宿営地攻撃により、自衛隊が帰ってしまうかもしれないと噂がたつたためでした。前代未聞のデモに、米英オランダ軍も驚いて、自衛隊に問合せが殺到しましたが、自衛隊がサマワ市民に支持されていた理由は以下のような例が考えられました。

①同地域の複雑な部族関係と特性を理解し、同じ民族衣装を着、同じ作法で接し、現地有力者との交渉事を急がず、まず信頼関係をつくることを重視していました。

②外国の軍人たちが表敬や見学のために訪ねてきましたが、彼らが一様に驚いたのは、自衛隊で働くイラク人作業員たちが、夕方になってもまだ働いていることでした。3時4時になると仕事が途中でも帰ってしまうことが一般的だったからです。他の軍の場合、イラク人作業員に作業を命ずると、彼らだけを働かせますが、日本では幹部自衛官でも、彼らと一緒にあって、ともに汗を流し、共に食事をし、食事を分けあい、休み時間には会話本を示しながら段取りをつけるなど、信頼関係ができていました。

③給水活動は大変感謝されました。戦争で上水道が破壊され、ユーフラテス川は水質が悪く、飲めばアメーバ赤痢が必発だったからです。

上から目線で水を取りに来いではなく、一日100トン近い水を作り、12両の給水車で現地に運びました。などなど、惜しまれつつ宿営地は2006年撤収しましたが、もともと日本人に対して、日露戦争・第二次世界大戦で白人と正面から戦った唯一のアジア民族で、同じアジア人として畏敬の念があり、日本の工業製品の質の高さはよく知られており、日本人の仕事に信頼があったそうです。



「自衛隊を守れ」デモ

しかし、日本では、『イラク・サマワでデモ、日の丸に火をつけて反日スローガンを叫ぶ』(NNN)等と真逆な報道がおこなわれ、このような真実が伝えられることはありませんでした。



サマワの子供の絵

(武士道の国から来た自衛隊) から転載